

# 森鷗外・森於菟共譯

## 『しあはせなハンス』

——明治期グリム童話翻訳への一考察

西 口 拓 子\*

はじめに

翻訳者として森鷗外と森於菟の名が並ぶ『グリム童話集』<sup>1)</sup>がある。昭和23年に文藝春秋新社より刊行された『しあはせなハンス』である。ここに収められた11話は、もともと明治30年代に鷗外の長男於菟が翻訳し、山君という筆名で雑誌に発表したものであった。「あとがき」によれば、共訳者として鷗外の名を連ねたのは出版社の意向で、「つまり世の中の人にわかりやすいということから」だという。<sup>2)</sup>実際に鷗外は息子の翻訳した文章に朱を入れているとはいえ、出版社の意向は明らかである。

まずは、この選集の冒頭に置かれた話の導入部を見てみたい。とりわけドイツ語圏ではよく知られた話であるが、『グリム童話集』のどの話だか分かるだろうか。

昔獨逸の寂しい片田舎に、貧乏な百姓が、一人の娘を相手に、心細く世を送つて居た。或る饑饉の年に、百姓は一人でも暮しかねるのに、その娘が生れつき大の不精もので、何もせぬゆゑ、百姓はもてあまして、いつそ

---

\*専修大学経営学部准教授

の事此娘を川か山へでも連れて行つて、殺してしまはうかとも思つたが、もしそれが露れて、自分が國法に問はれてはならぬと、それは思ひとどまつた。<sup>きて</sup>扱いろいろ考へ直した揚句、娘を國王の處に奉公させる事に極めた。(『ハンス』3頁)(引用文中の下線は筆者による。以降も同様。)

上記の引用箇所のみで、このグリム童話のタイトルを言い当てるのは殆ど不可能なのだが、続く部分が手掛かりとなる。

翌日百姓は直に王宮に往つて、次の事を話した。

「お願申上ます。私の娘はいろいろの事が出来ますから、どうか御殿に奉公を致させて戴きたいもので御座います。」

國王は笑ひながら、「其方の娘は一體何が出来るのだ。」

「何でも出来ますが、一番上手なのは、澤山の藁の束を、一晩中に紡いで黄金にいたしますので御座います。」これは是非娘を手離したいので、うそをついたのだ。(『ハンス』3-4頁)

ここでは「小人の名(癡杖子)<sup>はいじやうし</sup>」というタイトルだが、「藁を紡いで黄金に」することから、「ルンペルシュティルツヒェン」(KHM55)<sup>3)</sup>であることが分かる。上記の引用二か所に相当する部分を、『グリム童話集』の最終版(1857年)から引用してみよう。

昔、粉屋がいた。貧しかったが、美しい娘がいた。粉屋はあるとき、國王と話す機会があった。そしてもったいぶって、「私には娘がひとりおりまして、この娘は藁を紡いで黄金にすることが出来ます」と言った。(Grimm 1-274)

日本人の読者のために、物語の舞台が「獨逸」であることを明示するの

は理解できないことはない。しかし、粉屋が百姓に変えられただけでなく、飢饉のため、不精ものの娘を片付けようとしている、という状況が付け加えられているのはどうだろうか。よく知られているように、『グリム童話集』はグリム兄弟自身の手で第7版まで出版され、改版の際にテキストには手が加えられているため、異版が存在する。さらにグリム兄弟が友人ブレンターノのために書き留め、初版の刊行以前の1810年に送付した手稿も残されている。ところが於菟によるこの訳文は、グリムの手稿も含めていずれの版とも一致しない。また、『しあはせなハンス』の「あとがき」からはレクラム版を底本としていることが分かるため<sup>4)</sup>、明治初期の翻訳がそうであったように、英語版からの重訳である可能性も排除される。では、なぜ翻訳文がこのように原典と異なっているのだろうか。

その一方で、書名と同タイトルの「しあはせなハンス」(KHM83)は、先行研究においては、「これが明治期の同作品の邦語訳の中では一番原文に近い」<sup>5)</sup>と言われるほど忠実な翻訳なのである。他にも「雪姫」(「白雪姫」KHM53)が「原文に忠実な訳」<sup>6)</sup>であることも短く指摘されている。これらの話は忠実な翻訳の嚆矢としての意義はあるものの、内容的には特異な点もなく、また、グリム童話翻訳のパイオニアであるわけでもないため、森於菟の翻訳はこれまで衆目を集めることがなかったようだ。鷗外研究においても付随的に言及がなされる程度である。<sup>7)</sup>

本稿では、このように対照的な面を併せ持つ森於菟によるグリム童話の翻訳を考察していきたい。

## 1. 森於菟とグリム童話の翻訳

翻訳者である於菟(明治23-昭和42年)は、森鷗外(林太郎)と登志子(旧姓赤松)の間に明治23年9月に東京で誕生した。明治34年に高等科二

年を修了し、独逸学協会中学校二年に編入、その後、第一高等学校三部を経て、東京帝国大学医科大学、同理学部化学科、動物学科で学んでいる。東京帝国大学医学部解剖学教室助手、助教授、台北帝国大学医学部教授を経て、東邦大学教授を務めあげた人物である。

鷗外が8歳の時に父親からオランダ語の手ほどきを受けていたように、於菟も「幼時から独逸語を父にならって」いたという。散歩の際の教授や、赴任先の小倉から送られた手紙による「通信教授」のことなどを、於菟はエッセイに綴っている。<sup>8)</sup>

一方で、鷗外の昔話への関心は、日常生活からも伺い知ることができる。於菟の異母妹で作家の森茉莉（明治36-昭和62年）は、「雪白姫、薔薇姫、シンデレラ、金の毬と蛙の話、ハンスとグレエテ、赤頭巾」など、いずれも『グリム童話集』に収められている話を父親の膝の上で聞いたことを回想している。<sup>9)</sup>

そしてグリム童話を翻訳することになった背景を、於菟は次のように記している。「お伽噺についても父は見識があり、小波等の文に<sup>あきた</sup>嫌らなかつたのを私を通じて実現しようとしたのだ。」「この両方（『芸文』と『万年艸』）<sup>10)</sup>には私にグリムのお伽噺を数篇訳させそれを直して出してくれた。父のつけてくれた私の号が山君である」<sup>11)</sup>。その情景は『しあはせなハンス』の「あとがき」に描出されている。

父が、夕方家に歸つて夕食をすませ書齋でくつろいでいるところへ私が譯文をもって行くと、父はすぐ筆をとりレクラム版の原書と照し合わせながらいてねいになおしてくれた。<sup>12)</sup>

こうした親子の微笑ましい共同作業は、明治37年2月に開戦した日露戦争により、中断を余儀なくされる。鷗外は第2軍軍医部長として、同年4月に宇品から中国へ渡り、明治39年1月まで不在となったのである。鷗外

の出立後は、代わりに大久保栄<sup>13)</sup>に添削してもらった話を『心の花』に掲載していた。<sup>14)</sup>「あとがき」によれば、そうして発表されたのが「鐵のハイニリツヒ」(KHM1)、「しあはせなハンス」,「雪姫」で、その他の7話が鷗外との翻訳だという(タイトル等詳細は次節を参照)。実際には11話が収録されているのだが、「情の剛い子供」(KHM117)については、言及がないため、どちらの協力があったのかは不明である。この話に関しては、本稿第9節で考察する。

## 2. 森於菟が訳したグリム童話

鷗外の27回忌に合わせて『しあはせなハンス』を刊行するために、於菟は、明治30年代に雑誌に発表した話を探し求めた。しかし既に40年あまりの歳月が流れていたこともあり、『芸文』に掲載された一話を「入手できなかった」という。<sup>15)</sup>それは、明治35年8月に同誌に掲載された「勝曲りの王」(KHM52)のことである。

さらに3話、「あとがき」に言及がないが、於菟が翻訳をした話がある。「マリア姫」(KHM3)、「三人の怠慢者」(KHM151)、「ブレーメンの町音楽師」(KHM27)である。ここで、於菟が山君の名で発表したグリム童話全話を、初出の年月順に挙げておく。<sup>16)</sup>

勝曲りの王 (KHM52)	『芸文』 卷第二 明治35年 8月
(3) ○ヘンゼルとグレーテルと (KHM15)	『万年艸』 卷第一 明治35年10月
(2) ○蓼二篇 (KHM105)	『万年艸』 卷第二 明治35年11月
(1) ○小人の名 (一名癡杖子) (KHM55)	『万年艸』 卷第三 明治35年12月
(6) ○茨姫 (KHM50)	『万年艸』 卷第六 明治36年 6月
(10) ○星の銀貨 (KHM153)	『万年艸』 卷第六 明治36年 6月

- |                       |                           |
|-----------------------|---------------------------|
| (4) ○牝鶏の死 (KHM80)     | 『万年艸』 卷第八 明治36年 9月        |
| (7) ○賢い百姓の娘 (KHM94)   | 『万年艸』 卷第十二 明治37年 3月       |
| マリア姫 (KHM 3)          | 『心の花』 第八卷第八 明治37年 11月     |
| (8) ? 情の剛い子供 (KHM117) | 『心の花』 第九卷第八 明治38年 8月      |
| 三人の怠慢者 (KHM151)       | 『心の花』 第九卷第九 明治38年 9月      |
| ブレーメンの町音楽師 (KHM27)    | 『心の花』 第九卷第十一 明治38年 11月    |
| (5) □鐵のハインリヒ (KHM 1)  | 『心の花』 第九卷第十二 明治38年 12月    |
| (11) □雪姫 (KHM53)      | 『心の花』 第十卷第五, 六 明治39年 5-6月 |
| (9) □しあはせなハンス (KHM83) | 『心の花』 第十卷第九 明治39年 9月      |

( ) 『しあはせなハンス』 に収録されている話。( ) 内の数字は収録順を示す。

- 「あとがき」 から鷗外が添削したことが明らかな話
- 「あとがき」 から大久保が添削したことが明らかな話
- ? 「あとがき」 に言及がない話

『しあはせなハンス』 に収められていない話の中で、「勝曲りの王」は、初出年からみて、鷗外が補助していたことはほぼ間違いない。一方で、「三人の怠慢者」と「ブレーメンの町音楽師」は、その忠実な訳文と、発表時期から、大久保の補助によるとみてよいだろう。なぜなら彼の協力による

と明記された3話は、どれも極めて忠実な翻訳であり、それは先行研究でも指摘されたほどだからだ。「マリア姫」に関しては、より詳しい考察が必要であるため、「情の剛い子供」とともに第9節で扱う。

鷗外と翻訳したグリム童話のうち、「小人の名」、「ヘンゼルとグレエテル」、「茨姫」、「賢い百姓の娘」、これに加えて「膀胱曲りの王」では、大胆に変更された箇所が目にとまる。本稿では、これらの特色ある翻訳を中心に考察していく。

### 3. 省略と追加

では、於菟が鷗外と共に翻訳した話を見ていくが、まずは、「いばら姫」で王子が、眠る姫のことを聞き知る場面を、グリムのテキストと比較してみよう。

グリム最終版「いばら姫」

長く長く年がたってから、またひとりの王子がこの国に来て、ある老人からいばらの藪の話聞いた。藪の向こうには城があり、その中には驚くほど美しい姫がおり、いばら姫と呼ばれており、既に百年間眠っているとのこと。姫とともに王も后も家臣全員も寝ているとのこと。この老人は、祖父から聞いて知っていたのだが、これまでに大勢の王子が来て、いばらの藪を通り抜けようとしたのだが、藪に引っ掛けてしまい、悲しくも死んでしまったということだった。(Grimm 1-249)

於菟訳「茨姫」

長く長く年がたつてから、或王子が来て、茨姫と其二親との事を聞いた。其話をしたのは、極く老人であつたが、その茨姫の處へ往かうとおもつて、

茨に引つ掛つて死んだ王子達の話をも知つて居て傳へた。(『ハンス』55-56頁)

於菟訳の該当箇所はこの通り、短くまとめられている。これは、『グリム童話集』の刊行前に書き留められた手稿に似るほどに簡潔なのである。<sup>17)</sup>

このように原典と大きく異なるのは、鷗外の添削の仕方に理由がありそうだ。於菟は次のように報告している。

父の添削は誤譯や日本語としてのまちがいを正すばかりでなく、時によると私の原稿が朱でまつかになつてしまうこともあつた。私ばかりでなく家族のものが書いたもの、役所や文壇の後進の人たちの文章をもなおすことがあつたが、父が筆を入れると文章がずつと短くなり、それでいて意味はるかにはつきりするのがつねであつた。<sup>18)</sup>

於菟がグリム童話を翻訳し、雑誌に掲載していたのは、明治35年から39年にかけてである。<sup>19)</sup>「あとがき」によれば「やさしいドイツ文ならばさほど骨を折らずによめるようになったころのことで、私は毎日本郷駒込千駄木町の家から目白の獨逸學協會學校中學に通つていた」ときであつた。<sup>20)</sup>つまり当初は、弱冠12歳で雑誌に寄稿していたことになる。父親の強い影響下にあつたのも無理はない。

先にみたように、冗長とみなした部分を大胆に省く傾向は、「ヘンゼルとグレーテル」にも見られる。導入部で、両親が子棄ての相談をする場面は、グリムのテキストでは直接話法による夫婦間のやりとりで綴られているが、於菟訳では、「いばら姫」と同様に非常に簡潔になっている。では、お菓子の中から声が聞えてくる次の場面はどうだろうか。

「かじるぞ、かじるぞ、ほりほりかじる、



わたしの家をかじるのは、だれだ」。

子どもたちが返事をしました。

「風だよ、風だよ、  
天の子だ」。(野村訳 1-215, Grimm 1-101)

これは、グリムのテキストのみならず、フンパーディンクのオペラによってもよく知られているフレーズだが、於菟訳ではそっくり削除されている。<sup>21)</sup>また、グリムのテキストでは、ヘンゼルとグレーテルがお菓子の家を見つけ、魔女が中から姿を現す場面は、直接話法による言葉も交えながらの描写が繰り返されている。厳密な比較にはならないが、ドイツ語のレクラム文庫版の該当箇所は18行 (Grimm 1-100f.)、野村訳ちくま文庫版でも16行 (野村訳 1-214f.) にわたる描写のところを、於菟訳は「二人は腹が空いて居たから、ヘンゼルが屋根をむしれば、グレーテルは窓硝子をかじり初めた。そのうちに家の中から、一人の極く年の寄つたお婆あさんが出て来て」(『ハンス』23頁)と、至極簡潔にまとめている。

次に「腰曲りの王」(「つぐみひげの王さま」)を見てみたい。旅芸人との結婚を強制された王女(姫)は、夫から、市場でつぼ等を売るように命じられ、次のように思う。

「どうしよう」と姫は思いました。「わたしが市場に座ってものを売っているのを、お父さんの国から来た人が見たら、さぞあざけり笑うことだろう」。でもそんなことを思ったところで、どうなるものでもありません。ふたりが飢え死にしなければ、姫はそうするよりほかありませんでした。(野村訳 3-60, Grimm 1-256)

於菟の翻訳では、ここは完全に削除されている。そもそもこれは『グリム童話集』の初版には存在せず、第2版から追加された箇所であった。グリムのテキストは、改版の過程で描写が増える傾向があるのだが、口承の昔話では、痛みは「泣くこと」に、解放の喜びは「祝宴」等の目に見える行為・形に映され、登場人物の内面については語られないのが普通で、<sup>22)</sup> 上記引用部のような心理描写は、グリム童話を創作昔話 (Kunstmärchen) に近づけてしまっている。<sup>23)</sup> それに対して、於菟の訳では、昔話の文体にそぐわない箇所が削除されていることになる。

さて、この「勝曲りの王」の王女は、器量が良いため、つぼを短時間で完売することができる。於菟訳では、帰宅した妻を、夫はこう迎えている。

そこで王女は大喜びで家に返る [ママ] と、乞食も喜んで褒めそやした。<sup>24)</sup>

グリムのテキストでは、夫の反応は全く記述されておらず、これは、於菟訳での追加である。これも、分量としてはわずかであるが、思い切った加筆であり、大久保の助力による翻訳には、みられないものである。

#### 4. 結末句と繰り返し

ヨーロッパに限らず、昔話の文体的な特徴として結末句があり、<sup>25)</sup> それらは語りが終わる合図としての役割を果たしている。「ヘンゼルとグレーテル」の最後には「わたしの話はこれでおしまい。ほら、あそこをねずみが走ってる。あれをつかまえたら、大きな大きな毛皮のぼうしがつくれるよ。」(野村訳1-225, Grimm 1-104) があり、「つぐみひげの王さま」には「こうしてほんとうの喜びが、ようやくそのときからはじまりました。あなたもわたしも、そこにいあわせたかったね」(野村訳3-66, Grimm

1-258)がある。前者は第5版、後者は第2版より追加されたものである。ところが於菟訳は、どちらの結末句をも削除してしまっている。

グリム兄弟は上記の結末句のほか、諺や慣用句などを改版の過程でテキストに加え、民衆的な色合いを強めている。<sup>26)</sup>しかし日本の結末句は「めでたしめでたし」や「どんどはれ」などであり、ドイツのものとは趣を異にしていることもあり、他の翻訳者によっても省かれる傾向がある。「ヘンゼルとグレーテル」の結末句は、水野繁太郎らによる明治42年の『独逸文学叢書』<sup>27)</sup>をはじめ、金田鬼一による昭和23年の子ども向けの翻訳においても、省かれている。<sup>28)</sup>

これに対して、『心の花』のみに掲載された「ブレーメンの町音楽師」においては、結末句「この話はごく近頃の事でこれを話した人の口がまだ暖な程である」<sup>29)</sup>も訳出され、全体にも忠実な訳となっている。このことも、これが大久保の協力を得て訳された話であることを裏付けている。

ヨーロッパの昔話の特徴のひとつに3回の繰り返しがあることを、オルリク<sup>30)</sup>やリュウティが指摘している。日本においても例えば桃太郎が、犬、猿、きじと出会うたびに、「お腰のものは何ですか」、「日本一のきび団子だ」、「一つ私にもくださいな」、などのやりとりを繰り返し、計3回となっている。<sup>31)</sup>こうした反復は、耳で聞く場合には心地よいものだが、鷗外は冗長と判断したようだ。グリムのテキストのルンペルシュティルツヒェン(小人)は、初日は首飾り、翌日は指輪、三日目は最初に生まれる子をもらうことを条件に、部屋一杯の藁を紡いで黄金にしている。その際「かわりに紡いでやったら、何をくれる？」という言葉はその都度、計3回発している。於菟の訳では、直接話法のこの問いかけは削除され、一日目には「指環と首飾とをおれにくれれば、その代りに藁を紡いで遣らう」と自分から両方を一遍に要求している。こうして、一日短縮され、二日目に「子ども」を要求しているのである。(『ハンス』6-7頁)

## 5. 馴染みのないもの

鷗外の添削による「小人の名」（「ルンベルシュティルツヒェン」）においては、「粉屋」（Müller）が、「百姓」に変更されていることは、本稿の冒頭で紹介した。Müllerという言葉は、明治24年の愛柳子訳で「水車師」<sup>32)</sup>、明治39年の橋本青雨訳では「粉屋」<sup>33)</sup>とされている。同様に Müller が登場する「狼と七匹の子やぎ」<sup>34)</sup>では、明治20年の呉文聰訳『ハツ山羊』では「ベンキ屋」に変更され、明治22年の上田萬年訳『おほかみ』では「粉屋」とされるなど、ばらつきがみられる。筋の上では、「ルンベルシュティルツヒェン」の女主人公が「粉屋の娘」である必然性もないため、変更されたようである。さらに着目できるのは、ヴィルヘルム・ミュラーやゲーテの詩に代表されるような die schöne Müllerin 「美しき水車小屋（粉屋）の娘」<sup>35)</sup>といったイメージが日本にはないことだ。実際に、ドイツ語のテキストには「美しい娘」とあるにもかかわらず、於菟訳では、美しいかどうかは全く描写されていない（本稿「はじめに」参照）。その上、原文にはない「大の不精もの」という属性が付与されている。導入部で父親が、娘は藁を紡いで黄金にすることができる、と言って自らの娘を困難な状況に陥らせる理由として、飢饉で食べ物にも困っており、「大の不精もの」の娘をどうにか厄介払いしようとした、ということが付け加えられたのである。あたかも「ヘンゼルとグレーテル」の導入部の窮状と、「三人の糸紡ぎ女」（KHM14）の怠けものの娘を融合させたかのような状況が作り出されたのである。こうした動機づけは、口承の昔話とは相容れないものであるが、<sup>36)</sup>子棄てという残酷な行為の理由を説明せずにはいられなかったのだろう。

「ルンベルシュティルツヒェン」では、前述のように、報酬として子どもを渡す約束が成立するが、嘆き悲しむ後に小人は同情し、三日以内に自

分の名前を言い当てれば、子どもを取らずにおく、と言う。グリム版の後は、一日目に「Caspar, Melchior, Balzer から始めて、知っている名前をありったけ、順々に言って」いき、二日目には Rippenbiest, Hammelswade, Schnürbein という名前を言ってみる。三日目には、正解を知りながら、勿体をつけて Kunz と Heinz という誤答を出したあとで、3つ目によくルンペルシュティルツヒェンという名前を出している。(Grimm 1-276) 本稿にアルファベットで示したこれらの名前が、於菟の訳では全て省かれているのは、当時の日本人には全く馴染みのない名前であり、珍妙な名前にも面白みを感じにくいためだろう。彼の訳では、初日には「后はあらゆる人の名を、片端から<sup>なら</sup>並べて」言うだけであるし、二日目にも即座に正しい名前(はいじやうし)（癡杖子）を答えている。（『ハンス』8-9頁）

とりわけ、Caspar, Melchior, Balzer という名前は、東方の三博士を連想させるが、キリスト教文化には馴染みの薄かった明治期の日本では、意味がないと判断したのだろう。同時期には、橋本青雨が、小人の名を「珍五郎兵衛」と訳し、誤答を「ヤツトウ木太刀之助」「太郎作」「樵助」「八兵衛」等としている。<sup>37)</sup> こうした日本化は当時の翻訳においては珍しいものではなく、名前に関しては、菅了法が「灰かぶり（シンデレラ）」を「おすす」と絶妙に訳したことが知られている。<sup>38)</sup>

次に「脛曲りの王」（「つぐみひげの王さま」）を見てみよう。グリムのテキストで、父王が有無を言わず娘を結婚させる場面である。

姫がどんなに抗議しても、だめでした。牧師が呼んでこられて、いやおうもなく姫はすぐさまその旅芸人と結婚させられました。（野村訳3-54, Grimm 1-254）

下線部もキリスト教文化圏ではない日本では不要と考えたのだろう、於菟の訳では削除されている。その他「マリア姫」においては、天国の12の

扉を開けると「使徒」(Apostel)が一人ずついるのだが、これは「神様」に変更されている。当時は馴染みがなかった言葉だということは、水野の『独逸文学叢書』(明治42年)に、「「使徒」とは基督の十二人の弟子をいふ」<sup>39)</sup>との注釈が付けられていることにも示されている。

## 6. 「不道徳」なもの

「ヘンゼルとグレーテル」には、当時は理解しがたい行為があったようだ。原文では、グレーテルが魔女を退治し、ヘンゼルが解放された後、二人は「首にかじりつきあったり、はねまわったり、キスしあったり」(野村訳1-222, Grimm 1-103)して喜ぶのだが、於菟の訳は、これも「ヘンゼルは喜んで」(『ハンス』27頁)と短くまとめている。その10年ほど後に刊行された『模範童話集』においても、「ヘンゼルは子兎のやうに、ピョンピョン跳ねながら、嬉しさうに檻から出で、兄弟「ママ」が手を握りました」<sup>40)</sup>とされている。

これは、不道徳と思われたのではなく、喜びの表現としてのキスが、当時は知られていなかったためだろう。では、男女間のそれはどうだろうか。有名なのは、「いばら姫」の目覚めの場面におけるキスである。『グリム童話集』や、現在ではディズニーのアニメーション映画「眠れる森の美女」でも知られている場面である。<sup>41)</sup>日本では、大正10(1921)年刊行の2冊と昭和28(1953)年の翻訳においても、唇ではなく、頬、額、脛にキスをするに変更されているほどであるが、<sup>42)</sup>於菟はどう訳出しているだろうか。原典と比べてみよう。

グリム最終版「いばら姫」

そこに王女が眠っていた。王女があまりにも美しかったので、王子は目を

離すこともできず、かがんでキスをした。王子の唇が触れると、いばら姫は目をあげ、目を覚まして、王子をやさしく見つめた。(Grimm 1-250)

於菟訳「茨姫」

其中に美しい茨姫が眠つて居た。王子は覺えず王女に接吻した。其時王女が眠つてから丁度百年目の同月同日同刻であつた。王女は急に目が覺めて喜んだ。(『ハンス』57頁)

これまでの例に違わず、全体は簡素になっているものの、王子のキスは省かれていない。さらに注目できるのは、下線部を付け加えることで、来るべき時に来るべき救済者が現れたことを際立たせていることである。原典では、この場面の前に、王子が城に来た時が「ちょうど百年目」だという記述があるのみである。

さて当時は、男女間のキスは、不道德として排除される傾向があった。<sup>43)</sup> 例えば(於菟の3年後に刊行された)橋本青雨による翻訳では、「正體もなく倒れて眠つてゐる」のを見て「王子は姫を助け起して見ると、お姫様は初めて眼をさまし<sup>44)</sup>たことになっている。

於菟訳はそうした配慮はしておらず、やはり鷗外の添削による「賢い百姓の娘」においても同様で、夫婦間のキスは翻訳文から削除されることはなかった。(『ハンス』67頁)

子ども向けに『グリム童話集』を編纂する場合、問題とされる箇所が、「蛙の王さま」にはある。水中に落ちた金の毬を取ってくる代わりに、蛙は、王女の友となり寝食を共にすることを約束させる。最後に、「私は腹一杯にたべて眠くなつた。あなたの絹の寢床をとつて下さい、その中で一所に寝ませう」(『ハンス』44頁)と要求する場面があるのだ。ここは今日でも問題となる箇所だが、これは大久保と訳した話でもあり、削除されることはなかった。それに対して、明治29年の西翁訳では、蛙は食膳に届か

ないため、王女の膝の上に座ることを要求している。それを父親も命ずるため、王女は従うものの、嫌悪感を露わにし蛙の片脚をつかみ窓の外へ投げ捨ててしまう。<sup>45)</sup>問題となる寝室の場面は食後であるが、西翁は、早くも食事中に蛙が投げ捨てられることに変え、それを巧妙に回避している。ここでも蛙は、投げられて「容貌の麗はしい、太子でもあらふかと思はれる美少年」<sup>46)</sup>の姿に戻ることができる。蛇足ながら付け加えておくと、原典では美しいとされるのは「目」だけで、王子の容姿全体に関する描写はない。

## 7. 残酷なもの

とりわけ子ども向けの『グリム童話集』では、残酷な箇所を避ける傾向が今日の日本でもみられる。有名なのは「白雪姫」だ。殺害した証拠に白雪姫の肺と肝臓を持ち帰るよう継母が狩人に命じる場面や、継母が最後に受ける罰——真っ赤に焼けた鉄の靴を履いて死ぬまで踊り続ける——は削除されることが多い。<sup>47)</sup>於菟は、これを大久保と翻訳していることもあり、どちらも削除していない。(『ハンス』100, 120頁) 於菟に先立ち明治29年に出された巖谷小波の「小雪姫」<sup>48)</sup>は同話の翻案と言うべき作品であるが、ここでは、証拠としての内臓を要求することもなく、継母は小雪姫の死を確信している。だからこそ、一番の美女は誰かを尋ねた時に「小雪姫には如く者もなし」と言い張る鏡を、壊れたとみなしている。ここでは、鏡を庭に投げ捨てて幕となっており、継母が変装して自ら実行する殺害計画も、最後の残酷な罰も回避されている訳である。

残酷さという観点からは、「ルンペルシュティルツヒェン」の最後も話題となる。原典では自ら身体を真二つに引き裂いてしまうからである。於菟はこれを鷗外と訳したのだが、この場面は「左の脛を持ち上げて、真中



からぼきつと折つて」しまうのみに変更されている。(『ハンス』10頁) 橋本青雨も残酷だと考えたのであろう、次のように変更している。<sup>49)</sup>

一生懸命に、両手に力を籠めて、辛つと其足を抜き取りました。其様子が如何にも可笑しいので、御殿中はドッと大笑ひ、一寸法師は其後二度と姿を見せませんかつたとき。<sup>50)</sup>

偶然にも、『グリム童話集』の初版においても小人は怒って立ち去るだけであった。第2版から、リゼッテ(エリザベート)・ヴィルトによる類話に倣い、終結部が変更されたのであった。<sup>51)</sup>グリム兄弟は、初版の刊行後も類話を集め続け、より良いと思われた場合は、話全体もしくは一部を改版の際に取り替えていたのである。さらに遡って初版以前の手稿を見ると、ルンペルシュティルツヒェンは、調理用スプーンに乗って去っている。<sup>52)</sup>こちらのほうが、日本的には受け入れられた終わり方ではないか。とはいえ、1810年にグリム兄弟がブレンターノに送付した手稿が、彼の遺品から発見されたのは19世紀末のことで、シュルツ版が1924(大正13)年、レフツ版が1927(昭和2)年に刊行されたのであるから、<sup>53)</sup>於菟が翻訳をした時点では、手稿を入手することは殆ど不可能だったのだが。

## 8. 鷗外の翻訳

同じ「山君」の名で発表されたグリム童話の翻訳でも、大久保の添削による翻訳は忠実であるのに対し、鷗外との翻訳には大胆な変更も見られることを本稿では示してきた。於菟が翻訳にとりかかったのは12歳の時であったが、その文体が「老練」と評されたことは、<sup>54)</sup>鷗外がどれだけ朱を入れていたかを示唆してもいる。

他方、鷗外自身も、多くの作品をドイツ語から翻訳し（これには重訳も含まれる）、日本に紹介してきた。これに関しては既に多数の先行研究があり、「思い切った省略と的を射た説明および日本化が鷗外の翻訳術の核心にあった」<sup>55)</sup>などと評されている。また逆に、原文に存在しないものを追加することもあり、そうした行為は、批判を受けることもあったのだが、鷗外は次のように反論をしている。

小説脚本の翻譯は博言學的研究とは違ふ。一字一字に譯して、それを排列したからと云つて、それで能事畢ると云ふわけではない。故らに足した語を原文に無いと云つて難じたり、わざと除いた語を原文にあると云つて責めたりしても、こつちでは痛痒を感じない。<sup>56)</sup>

こうした態度による「鷗外の西洋文学の翻訳は西洋「文化」の翻訳」だとも言われる。「それは、おのれの教養と文化的背景を抵当にして行なった賭け」であり、「チンプンカンプンな逐語訳ではない、日本語で通用するダイナミックな意識」だというのだ。<sup>57)</sup>こうした「ダイナミックな意識」は、グリム童話での於菟との共同作業にもみられた。功罪相半ばする鷗外の翻訳方法ではあるが、鷗外による朱の入ったグリム童話においても、明治期の翻訳に見られるような「家中心的な考え方」や「忠孝の徳」<sup>58)</sup>といった価値観を無理に埋め込むことはされていない。当時の例として、ほぼ同時期に訳された次の2話を見てみたい。まずは明治43年の柴田流星による「兄と妹」（「ヘンゼルとグレーテル」）の最後である。ヘンゼルらが魔女の宝物（ここでは「魔法の珠」）を奪い、無事に帰宅する場面に、下線部が付け加えられている。

兄妹は阿父さんに思ふままの孝養も出来、何不自由なく楽しい月日を送りましたとき。<sup>59)</sup>

次にみる「星の銀貨」は、自らも貧しい孤児の娘が、より貧しい人に全てを分け与える話である。明治41年の木村小舟の「星娘」では、冒頭から父母の病気について詳しく語られ、昔話が現実的な話に変質されている。<sup>60)</sup> さらに木村はこの娘をお梅と名付け、「神様はお梅の行を、始終御覧になつて居りましたが『この子は本當によい子だ、こんなよい子は早く助けてやらねばならん』と仰しやいまして、天から何かお降らせになりました」<sup>61)</sup> という文章を加えている。こうした加筆は鷗外との翻訳には見られない。

最後に、於菟訳のおよそ10年前に発表された「しあわせなハンス」の終結部を見てみたい。於菟は、この話を大久保と訳したため、忠実なものとなっており、比較材料にはならないが、当時の加筆例としては考察の意義がある。この話の主人公であるハンスは、7年間の報酬として得た大きな金塊を、まずは馬と交換し、次に牛、豚、鷺鳥、研ぎ石、というように、金銭上はより価値の少ないものと交換してしまう。その砥ぎ石でさえ井戸に落としてしまうのであるが、ハンスは喜んで母のもとに帰っている。アンチメルヘンと呼ばれることもある話である。<sup>62)</sup> 明治25年の「鈍太郎物語」(訳者不記)は、最後に次のような文章を付け加えている。

鈍太郎は其名の通り愚<sup>おろか</sup>なり。されば物事を爲<sup>な</sup>すに軽々しくすべからず。今直ぐ成就せざればとて、他に目的を變<sup>か</sup>ふべからず。又己れの考なくして他人の言葉を無暗に信ずべからず。此話を讀給ふ少年少女諸君、夙<sup>つと</sup>に悟り給ふ所ならん。<sup>63)</sup>

下線部のような教訓は、話の面白みを削いでしまっている。この話はむしろ、金田鬼一が『まほうのふえ』の序で指摘しているように、マタイ伝第18章「なんじらもしひるがえりて幼児のごとくにならずば、天國に入らざるべし」<sup>64)</sup>の教えを体現していると考えerるほうが妥当だろう。こうして話を変質させることは、当時には珍しいことではなかったのである。<sup>65)</sup>

## 9. 「マリア姫」と「情の剛い子供」

『心の花』に掲載された「マリア姫」と「情の剛い子供」は、どちらの協力を得て翻訳したのかが不明な話であることは本稿第2節で触れた。同誌に掲載された話は、殆どが忠実な翻訳で、それらは大久保の添削によるとみられる。ところが「マリア姫」には特徴がある。「禁じられた戸は開けていない」と言い張るマリア姫に対して、於菟訳の聖母マリアは「虚言をつくものは、天國に居る價値のないものだから、何處へでも行くがいい」<sup>66)</sup>と言いつけている。その後、地上に下ろされた娘は、王と結婚し、息子を二人生むが、否認を続けたため聖母マリアに取り上げられてしまう。三人目には娘が生まれ、聖母マリアが再び現れ、戸を開けたかどうか尋ねるのだが、「いいえ私は開きは致しません」と答へたので、聖母マリアは怒つて、女王を地に投げ下して王女を取上げた」<sup>67)</sup>。下線部はどちらも、原文には存在しない。グリムのテキストでは淡々と行動している聖母が、於菟訳では怒りを露わにしているのである。大久保との翻訳ではこうした追加は一切行われていない。

一方の「情の剛い子供」は非常に短い話で、翻訳文には、本稿で考察してきたような目立った変更点も見られない。40年も前のことで確かな記憶がなかったため、於菟は「あとがき」では意図的に触れていないのであろう。仮にこれが大久保の補助によると想定しても、この「マリア姫」と「情の剛い子供」の発表時期には、9か月の間隔がある。発表時には、鷗外は既に不在であったが、前述の翻訳上の特徴を考慮すれば、「マリア姫」の方は、出発前に鷗外に見てもらっていたことはほぼ間違いなさだろう。

## おわりに

グリム童話が初めて日本語で紹介されたのは、明治6年4月の松山棟庵訳『サルゼント氏第三リイドル』(Sargent's Standard Third Reader 1868の翻訳)所収の「鍔沓の釘の事」(KHM184)だという。<sup>68)</sup>単行書の出版は、明治20年、菅了法の『西洋古事神仙叢話』(11話)が最初である。明治20年代以降は、『幼年雑誌』、『少年世界』、『少国民』などの児童雑誌や、『女鑑』などの女性誌に、グリム童話の翻訳が個別に掲載されるようになっている。於菟の翻訳は、児童向けのものではないが、雑誌という媒体は共通している。松山も菅もそうであるように、初期には英語からの重訳が主であったが、於菟は、ドイツ語原典からの翻訳を行った。それでも計210番までの話を収めた『グリム童話集』最終版のうち、於菟はわずか15話(「墓」を2篇と数えても16話)を発表したにすぎない。忠実な翻訳の『グリム童話集』全集は大正13年(第2部は昭和2年)の金田鬼一訳まで待たなくてはならなかった。

本稿の冒頭で紹介した「ルンペルシュティルツヒェン」など鷗外との翻訳には、大胆な変更点が見られたが、それでも、巖谷小波の「白雪姫」の翻案のように、話の核心をなす筋を変えてはいない。同時期の翻訳に特徴的な、教訓や当時の価値観を押し付けるような書き換えも行っていない。一方で、グリム兄弟が改版の過程で追加した箇所を削除し簡素にしているところは興味深い。とりわけ、グリム童話を創作昔話に近づけたと言わしめる心理描写を削除しているのは、鷗外の感覚の鋭さを——時として原作を超えるという鷗外の翻訳への賛辞を——裏付けているかのようでもある。むろんこれを翻訳と呼んでよいかの問題は残るのだが。

『しあはせなハンス』には、40年前に雑誌に掲載した話がほぼそのまま

掲載された。新仮名遣いにも直さず、鷗外の好みで使用した難しい言葉も残したと「あとがき」にある通りである。本稿では、鷗外の添削による翻訳がどれだけ個性的なものになっているかを考察してきたが、もしも翻訳文に手を入れるのであれば、何をどこまで直すのかという問題にも突き当たる。大幅に修正をすれば、共訳者としての鷗外の意義も失われてしまうからである。そうして鷗外の筆致が感じられるテキストが残されたのである。

今日では、もはや西欧文化も珍しいものではなくなり、忠実な翻訳にはより良いものがあり、大久保との翻訳は精彩を欠いている。他方で鷗外とのダイナミックな翻訳は、文化的な制約もあった中での文化伝達の大胆な試みとして、新たな関心を持って読ませるものとなっているのである。

本稿は、平成21年度専修大学研究助成「明治期日本における「グリム童話」翻訳」の研究成果の一部である。

## 注

- 1) グリム兄弟の『子どもと家庭のための昔話集』を、本稿では『グリム童話集』と略す。Märchen の訳語としては、「昔話」を用いる。グリム童話の題名は、森於菟が翻訳した話に言及する場合を除いて、野村滋訳『完訳グリム童話集』全7巻、ちくま文庫、2005-2006年に拠る。以下、本書からの引用は、「第1巻234頁」の場合には「野村訳1-234」と略す。グリムの最終版テキスト（1857年）からの引用はBrüder Grimm. Kinder- und Hausmärchen. Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen. Hrsg. v. Heinz Rölleke. 3 Bde. Stuttgart 2010に拠り、「Bd.1 S.234」を「Grimm 1-234」と略す。
- 2) 森鷗外・森於菟訳『しあはせなハンス』文藝春秋新社、昭和23（1948）年、「あとがき」3頁。本書からの引用は、本稿では以下『ハンス』と略し、該当頁と共に示す。また引用文中の旧字は残すが、振り仮名は適宜省略する。
- 3) 慣例に従い、『グリム童話集』の各話の初出時に、最終版（1857年）での収録番号をKHMとともに示す。
- 4) 『ハンス』『あとがき』2頁。レクラム文庫（Reclams-Universal-Bibliothek）は、ドイツのペーパーバック・シリーズ。これを手本として日本の文庫本が作られた。

- 5) 川戸道昭「グリム童話の発見」『日本におけるグリム童話翻訳書誌』川戸道昭他編、ナダ出版センター、2000年、5-50頁。特に8頁参照。
- 6) 野口芳子「改変された日本の「白雪姫」」、川戸道昭他編 前掲書 51-79頁。57頁。
- 7) 例えば、明治35年の項には以下の記述がある。「雑誌『万年艸』巻第壺を発行し、[...]長男於菟に勧めて翻訳させたグリムの伽噺「ヘンゼルとグレエテルと」に手を入れて、「山君譯」として掲載する」。苦木虎雄『鷗外研究年表』鷗出版、2006年、534頁。
- 8) 森於菟『父親としての森鷗外』筑摩書房、昭和44（1969）年、88-91頁。手紙は、『鷗外全集 第33巻 書簡』岩波書店、昭和53（1953）年、93頁他に収録されている。
- 9) 森茉莉『父の帽子』筑摩書房、昭和50（1975）年、57-58頁。言及されている話は順にKHM53、50、21、1、15、26である。鷗外の関心は日本の昔話にも向けられており、大正9年に松村武雄らと共著で『標準お伽文庫 日本童話』（培風館）等も上梓している。
- 10) どちらも鷗外が主宰していた雑誌である。雑誌名は、川戸道昭他編『日本におけるグリム童話翻訳書誌』（ナダ出版センター、2000年）の表記に準ずる。
- 11) 森於菟 前掲書 237頁。小波は、巖谷小波のこと。
- 12) 『ハンス』「あとがき」1-2頁。
- 13) 大久保栄は東大医科の秀才で、於菟の勉強の監督のために、森家に寄宿していた。文筆にも長じており、『芸文』『万年艸』等にも寄稿していた。（森於菟 前掲書 41頁）『万年艸』巻第十二には、於菟の翻訳と並び、Emil Ertl の作品の大久保栄が掲載されている。
- 14) 森於菟 前掲書 237頁。鷗外の不在により『万年艸』が廃刊となったため、鷗外の友人で歌人の佐々木信綱主宰の雑誌に掲載してもらったという。
- 15) 『ハンス』「あとがき」4頁。これらの雑誌は、今日では復刻版（臨川書店、1968年）が刊行されているため、於菟の翻訳全てを読むことが可能である。
- 16) 『万年艸』掲載時のタイトルを示す。『しあはせなハンス』では少々変更され、「ヘンゼルとグレエテル」、「小人の名（癡杖子）」、「鐵のハインリツヒ」となっている。
- 17) 手稿（1810年）のテキストは、非常に簡素である。Rölleke, Heinz (Hrsg.): Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm. Cologny- Genève 1975, S. 108.
- 18) 『ハンス』「あとがき」2頁。
- 19) 於菟は、その他アンデルセンの『絵のない絵本』の翻訳なども、これらの雑誌に山君の名で寄稿していた。
- 20) 『ハンス』「あとがき」1頁。
- 21) 子どもたちの返事「風だよ…」は『グリム童話集』第2版（1819年）より付け加えられたものであるが、前半部分は1810年の手稿から存在する。（Rölleke 1975, S. 74.）
- 22) Lüthi, Max: So leben sie noch heute. 3. Aufl. Göttingen 1989, S. 47.

- 23) グリム兄弟による加筆については、拙論「グリム『昔話集』——グリムの加筆と「神話」へのまなざし——」東京外国語大学大学院博士論文、2003年、33-37頁参照。ただし、今日ではNeuhausのように、全てを創作昔話と捉える見方もある。Neuhaus, Stefan: Märchen. Tübingen und Basel 2005.
- 24) 山君「勝曲りの王」『芸文』巻第二、明治35年8月、47頁。
- 25) 発端句と結末句に関しては、Lüthi, Max: Das Volksmärchen als Dichtung. Düsseldorf/Köln 1975, S. 62.
- 26) Bluhm, Lothar/Rölleke, Heinz: „Redensarten des Volks, auf die ich immer horche“. Märchen-Sprichwort-Redensart. Neue Ausgabe. Stuttgart 1997.
- 27) 水野繁太郎他訳註『独逸文学叢書第2編 雪姫、兄と妹』有朋堂、明治42年。
- 28) 金田鬼一『グリム童話上』広島図書、昭和23(1948)年、82頁。金田鬼一の『完訳グリム童話集』(岩波文庫、昭和54(1979)年、全5冊)には、結末句も訳出されている。また、中島孤島『グリム御伽噺』(富山房、大正5年)でも同様に訳出されている。
- 29) 山君訳、『心の花』第九卷第十一、明治38年11月、49頁。
- 30) Olrik, Axel: Epische Gesetze der Volksdichtung. Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur 51. Berlin 1909, S. 1-12. 特に S. 3ff.
- 31) 稲田浩二他編『新版日本昔話ハンドブック』三省堂、2010年、215頁他。
- 32) 愛柳子「黄金のわら」『明治期グリム童話翻訳集成』川戸道昭/榊原貴教編、アイアールディー企画(紀伊國屋書店)、全5巻、第3巻、269頁。
- 33) 橋本青雨「珍五郎兵衛」『独逸童話集』大日本国民中学会、明治39年、179頁。
- 34) これは、明治19年から明治末までに最も頻繁に翻訳されたグリム童話である。中山淳子『グリムのメルヒェンと明治期教育学』臨川書店、2009年、13-16頁参照。
- 35) 渡辺国彦「『美しき水車小屋の娘』(Die schöne Müllerin) のもう一つの顔」『研究紀要』第30号、東京音楽大学、2006年、67-88頁。
- 36) Lüthi 1975, S. 82参照。
- 37) 橋本青雨 前掲書 182-184頁。
- 38) 「[シンデレラ] 即ちおすゝと呼びける」。菅了法(桐南居士)訳『神仙叢話』集成社、明治20年、135頁。
- 39) 水野繁太郎他訳註『独逸文学叢書第3編 偉人ペリクレス、天の鍵』有朋堂、明治42年、76頁。
- 40) 「林の棄兒」『模範童話集』童話研究会編、博文館、大正14年、45頁。
- 41) フランスのペロー版にはキスはなく、王子が、うっとりして王女のそばに跪くだけで、目を覚ましている。「眠れる森の美女」『完訳ペロー童話集』新倉朗子訳、岩波文庫、1982年、165頁。
- 42) Noguchi, Yoshiko: Rezeption der Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm in Japan. Inaugural-Dissertation. Marburg 1977, S. 170ff.



- 43) Noguchi 1977, S. 170ff. にも詳しい。
- 44) 橋本青雨 前掲書 238-239頁。
- 45) 西翁訳「蝦蟇の王の話」川戸道昭／榊原貴教編 前掲書 第1巻, 27頁。
- 46) 西翁訳「蝦蟇の王の話」同28頁。
- 47) 宮下啓三『メルヘンの履歴書』慶應義塾大学出版会, 1997年, 22-30頁。野口「改変された日本の「白雪姫」」(川戸道昭他編 前掲書)にも詳しい。
- 48) 巖谷小波「白雪姫」川戸道昭／榊原貴教編 前掲書 第3巻, 181-185頁。
- 49) 「昔話では血は一滴も流れないし, 傷口も開かない。ルンベルシュティルトツヒェンは自分で自分を真っぶたつにひき裂くが, それをリアルに思い浮かべる人はいない。まるで紙の人形が二つに切られるように, まったく等しい二つの部分が生ずるだけである。」リュウティ『昔話の本質』野村滋訳, ちくま文庫, 1994年, 105頁。Lüthi, Max: Es war einmal. Göttingen 2008, S. 64. それでも, やはり残酷に思う翻訳者や編集者は少なくないようだ。
- 50) 橋本青雨 前掲書 185頁。
- 51) Rölleke, Heinz: Nachweise. In: Brüder Grimm. Kinder- und Hausmärchen. Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen. Hrsg. v. Heinz Rölleke. 3 Bde. Stuttgart 2010, Bd. 3, S. 482.
- 52) Rölleke, Heinz (Hrsg.): Kinder- und Hausmärchen. Gesammelt durch die Brüder Grimm. Vergrößerter Nachdruck der zweibändigen Erstausgabe von 1812 und 1815. Göttingen 1986. 3 Bde., Bd. 3, S. 28f., Rölleke 1975 S. 240f.
- 53) Schultz, Franz (Hrsg.): Die Märchen der Brüder Grimm in der Urform nach der Handschrift. Frankfurt a. M. 1924. / Lefftz, Joseph (Hrsg.): Märchen der Brüder Grimm. Urfassung nach der Originalhandschrift der Abtei Ölenberg im Elsaß, Heidelberg 1927.
- 54) 森於菟 前掲書 237頁。なお, Noguchi 1977にも父親が手を貸したため非常に洗練された文章になっているとの指摘がある。Noguchi 1977, S. 119f., 218.
- 55) 長島要一『森鷗外の翻訳文学』至文堂, 1993年, 50頁。
- 56) 森鷗外「翻譯について」『翻訳文学』河盛好蔵編, 角川書店, 1961年, 222頁。
- 57) 長島要一『森鷗外文化の翻訳者』岩波新書, 2005年, 79頁。
- 58) 大淵知直「異文化間受容とメルヘンの受容——『八ツ山羊』とモラエスをめぐって——」『ヘルダー研究』日本ヘルダー学会, 2001年, 第7号, 163-181頁。165頁参照。
- 59) 柴田流星『お伽草紙 日曜学校話材 第4編』教文館, 明治43年, 24頁。
- 60) 中山によると, 木村は波多野貞之助らの日本語訳を利用したようだが, この変更も波多野らの訳に由来している可能性がある。中山淳子 前掲書 190頁, 396-400頁。
- 61) 木村小舟『教育お伽噺』博文館, 明治41年, 106頁。

- 62) 野村注『グリムの昔話と文学』ちくま文庫，1997年，109頁。
- 63) 「鈍太郎物語」川戸道昭／榊原貴教編 前掲書 第4巻，140頁。
- 64) 金田鬼一『まほうのふえ』講談社，昭和24（1949）年，3頁。
- 65) 明治期に「教育的」に書き換えられた話の例は、中山淳子 前掲書 74-89頁に詳しい。
- 66) 山君「マリア姫」『心の花』第八卷第八，明治37年11月，32頁。
- 67) 山君「マリア姫」同34頁。
- 68) 府川源一郎「アンデルセン童話とグリム童話の本邦初訳をめぐって」『文学』第9巻・第4号，岩波書店，2008年，140-151頁。